ケニアの母子

ケニアの母子の健康を守る、住民たちの母乳育児推進活動

特定非営利活動法人 HANDS　プログラム・オフィサー　佐　伯　　亨

特定非営利活動法人HANDS（Health and Development Service）は、国際保健医療協力をおこなう団体として2000年に設立。世界の人びとが自らの健康を守ることができる社会を実現するために、各地で活動しています。現在は10カ国で事業を展開。現地の人たちが主役となってすすめる、保健の仕組みづくりと人づくりを側面からサポートしています。　http://www.hands.or.jp/

Akira SAIKI
1976年5月生　大阪府出身
2000年　早稲田大学　第二文学部卒業
2006年　名古屋大学大学院国際開発研究科　国際協力専攻博士前期課程修了
日本赤十字社、（社）国際厚生事業団にて勤務
2010年9月より現職

ケニア共和国は面積58.3万km^2（日本の約1.5倍）の広さを持つ国で、人口は3,980万人、農業（コーヒー、茶、園芸作物など）がGDPの約25%、労働人口の約60%を占めています。また、首都のナイロビはアフリカの中でも特に発展した大都市として知られています。

私たちは2005年からケリチョー県[1]で活動しています。同県はナイロビから西北西に約250km、車で約5時間の距離にあります。平均的な標高が1,000m～1,800mの高原・山岳地域で涼しく、総じて雨量に恵まれ穀倉地域として知られており、特に茶葉の生産で有名な地域です。

そのようなケリチョー県で、特に2009年からは生後6カ月間の完全母乳育児（水やそれ以外のものを与えず母乳のみで育てること）の推進を切り口として、母子保健状況を改善する活動を実施しています。

完全母乳育児で赤ちゃんを健康に

私たちが完全母乳育児を切り口とした理由は、その方法が特に乳児の栄養不良を防ぐこと、子どもを健康に育てることに効果があるとされているからです。また、ケリチョー県を選んだ理由はいくつかありますが、活動開始当初、特にケリチョー県のあるリフトバレー州においては、乳児栄養不良の傾向を測る低出生体重児率の割合が全国平均に比べてやや高く、乳幼児の栄養不良が母子保健課題のひとつとなっていたことがあります。

乳児期の栄養不良を背景とした死亡を避けるにあたっては、母乳が栄養や免疫力の面で最も優れた食事とされています。世界保健機関（WHO）では生後6カ月まで完全母乳育児と、その後は適切な食事を補いながら2歳かそれ以上まで母乳を続けることを推奨しています。それに基づき、私たちは6カ月間の完全母乳育児を推進することにより、乳幼児の栄養状態、地域の母子保健状況を改善したいと考えました。

私たちが行った調査では、ケリチョー県の生後6カ月間の完全母乳率は5.1%と非常に低い状況でした。その原因の中には、母乳育児についての知識に乏しい母親が、生後1カ月のかなり早い段階でウジ（トウモロコシ粉や雑穀をお湯で溶き粥状にしたもの）を与えてしまうことがありました。そこで、私たちはケリチョー県の5つの地域で、正しい知識をもって完全母乳育児を継続できる母親を増やし、乳幼児の栄養状態を改善することを目的に活動を開始しました。

活動を支える三本の柱

私たちの活動は、三本の柱により構成されています。ひとつはそれぞれの地域のコミュニティで

[1] ケリチョー県は2009年に東ケリチョー県、西ケリチョー県に行政区分が分割されましたが、行政機能がまだ完全に分割されていないので、ここでは「ケリチョー県」で統一します。

暮らす人々への働きかけをするもの、次に活動している地域にひとつずつ存在する保健医療施設で働く人々への働きかけをするもの、最後に、私たちは特にケリチョー県保健局と協働していますが、そのような行政組織への働きかけをするものです。

ここでは、私たちがどのような働きかけを行ったかを、いくつか紹介します。

①コミュニティでの活動

1) パートナーズ・ワークショップ

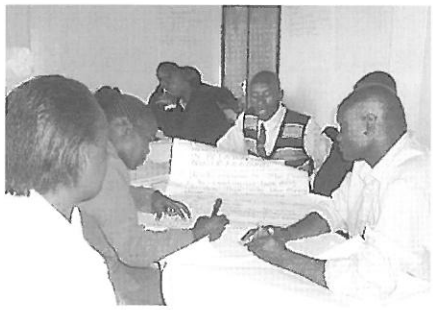
2010年の2月および10月にパートナーズ・ワークショップを実施しました。これは、プロジェクト地域の保健医療施設に勤めるスタッフとコミュニティの代表者、つまり母子を支える関係者たちが同じ場所に集まり、完全母乳育児に関する基礎的な研修を受けるものです。コミュニティ代表者たちと保健医療スタッフは共に2.5日間の研修を受け、保健医療スタッフはその後専門的な内容の講義を2.5日間、合計5日間の研修を受けました。

本ワークショップでは講義の他、地域別に参加者が分かれて、自分たちがいますぐ取り組める問題とその解決に向けた活動計画（アクションプラン）を作成しました。完全母乳育児の推進にあたり何が問題で、その原因はなにか、推進するためにはその地域でどのような活動を、いつ、どこで、誰が、誰を対象に行うのか、ということを考え、議論・立案しました。

現在コミュニティでは、この研修を受けた人々が完全母乳育児推進の要となって活動しています。私たちは彼らを、完全母乳育児推進のためのサポートグループメンバーと呼んでいます。彼らはそれぞれの地域で自主的に活動しており、例えば教会等人々が集う場所で母乳育児について話したりしています。ある住民からは「サポートグループの女性からいろいろと習い、自分でも他の母親に完全母乳育児を教えている。また、自分の娘が最近出産したが、完全母乳育児を実行している」といった話が出る等、彼らの活動が草の根からの母子保健の改善を担っています。

2) 世界母乳育児週間にかかるキャンペーン

毎年8月1日～7日は世界母乳育児週間。世界中120カ国以上で、完全母乳育児を推進するイベントが実施されています。私たちも2010年、2011年の8月に、活動地域で完全母乳育児を推進するキャンペーンを実施しました。



アクションプランを作成する参加者たち

このキャンペーンは、各地域の保健医療スタッフやサポートグループメンバーが中心となって準備し、住民へ参加を呼びかけました。彼らの意欲的な行動により、2010年には約900人、2011年にはさらに増えて約1,400人もの人々がキャンペーンに参加しました。赤ちゃん連れのお母さん、お父さん、子どもたち、お祖父さん、お祖母さん、皆に完全母乳育児を広める恰好の場です。

キャンペーンではまず参加者たちが横断幕を掲げて行進し、完全母乳育児の大切さについて地域の人々に訴えました。ある地域では行進し保健医

横断幕を掲げての大行進

劇や歌等の催し物で、完全母乳育児の大切さを訴えた

療施設に到着した後も、参加者全員でダンスするほどの興奮ぶりでした。また、行進の他にも、住民グループによる、完全母乳育児の大切さを訴える劇や歌、詩の朗読といった催し物が披露されました。

住民は母親や青年、小学校といったグループに分かれ、キャンペーン当日まで催し物の練習を重ねてきたそうです。例えば、お揃いの衣装で登場し歌を歌ったり、また完全母乳育児について扱う劇の中で、乳幼児健診に行くと待たされることが多いという体験を織り交ぜたり、小道具も乳児用体重計を段ボールで作ってそれらしく見えるようにしたりと、真剣に考えられた催し物は時に観客の大爆笑を誘い、大いに盛り上がりました。こうした伝え方がここでは人びとの心に強く残るのです。

②保健医療施設での活動

1) テクニカル・ワークショップ

パートナーズ・ワークショップに参加した保健医療スタッフは、母乳育児推進の中心となり、各地域で活動していますが、さらに、彼らは2010年11月に実施された、テクニカル・ワークショップにも参加しました。本ワークショップはパートナーズ・ワークショップと同様5日間の日程で、保健医療スタッフがより専門的な講義や実習を受講するものです。

パートナーズ、テクニカルの両研修に参加することで、ケニア政府が推進している母乳育児のカリキュラム「Infant and Young Child Feeding (IYCF)」と同じ研修内容、研修時間を受講することになります。両研修に出席し認定を受けた保健医療スタッフは、母乳育児に関する専門的知識を修めた者として、教える立場で活動ができるようになりました。

本ワークショップでは講義の他、赤ちゃんの身長を正しく測る方法を学んだり、県病院に赴き診察待ちをしている母親や妊婦に対し離乳食に関するインタビューを行う等、保健医療スタッフの日常の業務に関わる実習が行われました。

また、母乳育児に関する専門的な内容を記載した教材を、参加者ごとに1冊ずつ配布しました。研修終了後は教材を各保健医療施設で保管するように伝え、本ワークショップに参加しなかったスタッフも利用できるように配慮しました。

赤ちゃん人形を使い実習を行う

③県保健局での活動

1) サポートモニタリング

県保健局のスタッフと共に、私たちは活動地域の各保健医療施設を毎月1回訪問しています。私たちはこれを「サポートモニタリング」と呼んでいます。

具体的には、保健医療スタッフがワークショップで学んだことを日常業務に反映しているか、また、それまでの訪問で指摘した改善点を修正し、適切に母乳育児・栄養相談を実施しているかなどを確認します。さらに、HANDSが作成したフォローアップ用観察シートを活用し、乳幼児健診の実施数などの記録状況、ワークショップで作成したアクションプランの実施状況、保健医療スタッフの勤務態度などを確認するとともに、来院者へのインタビューを行っています。

現地の人たちの声と変化の兆し

私たちは前述したもの以外にも、小学生児童向けにやさしく完全母乳育児や衛生について説明するスクールヘルストーク、母乳の栄養について記載されたビラ教材の配布・説明等の活動を実施してきていますが、当然のことながら、その地域で長年暮らしてきた人々の意識を、一朝一夕に変えることはできません。しかし、ゆっくりと、成果を示す事例が現れてきています。

■サポートグループメンバー

「パートナーズ・ワークショップに参加した後、

自分の妻が出産したので、完全母乳育児を実行しました。子どもは健康に育っていて、他の赤ちゃんに比べて病院にかかる回数が少ないです」

「母親たちに完全母乳育児について勧めても、以前であれば、自分の母や姑が反対しているから、と受け入れてもらえませんでした。しかし、今はそのようなことを理由にして受け入れない人がいなくなりつつあります」

■保健医療スタッフ

「完全母乳育児をしている母親と５カ月の赤ちゃんが健診に来た時、とても健康でした」

完全母乳育児で育てたと自信を持って話す母親

このほかにも、コミュニティに暮らす人々や保健医療スタッフの意識・行動の好ましい変化について、うれしい声が聴こえてきています。このような人々の声に私たちは大いに励まされながら、地道な活動を続けています。

私たちの完全母乳育児を推進する活動の結果、人々の知識や意識、行動に変化が起き、 そのことが赤ちゃんの健康を守るための一助となってくれたら、こんなにうれしいことはありません。「元気な子を産みたい。丈夫な子に育てたい」という人々の思いを無駄にすることのないよう、今後も現地で活躍しているサポートグループメンバーのような人たち、関係する人々と協力しながら支援をしていきたいと思っています。

広告